

2022年度 法人事業報告

～はじめに～

今年度もコロナ感染の影響は大きく、利用者・家族・職員共に日々感染予防に気を遣いながらの一年となりました。特に年末からの感染拡大は、職員全体でカバーし乗り切ることができました。コロナ禍で様々な配慮は必要でしたが、利用者・家族の負担が増える事業所の閉所を最小限にできたのも各事業の努力によるものです。また、このような状況の中でも通所事業での利用者の加齢に伴う日課や支援の工夫、コロナ禍での工賃保障、居宅事業ではそれぞれニーズに基づいて支援を行ってきました。

国のコロナ感染に対する考え方が変わりましたが、法人としては引き続き感染予防、対策を行いながら日常生活を取り戻せるようにしていきたいと考えています。

～法人全体～

今年度、三つの重点課題として、「①利用者支援の質の向上、②働きやすい職場づくりに向けた人材育成、③経営職・管理職集団の育成」を上げ取り組んできました。職員会議において事業を超えみんなで議論し理解できる工夫や、管理職と中堅職員の意見交換会、人材育成や労務管理に関する研修等行いました。しかしながら、日々起きる問題への対応や、検討で留まっていることも多くあり今後の課題となっています。

○今後の法人のあり方検討会

この間の法人としての様々な問題から、経営職への不信、職員との信頼関係に大きく影響し、主任等の退職となっていました。そういった現状を改善していくため「今後の法人のあり方検討会」を開催、理事長をはじめ監事や理事の助言をもらいながら、経営職・管理職・職員で検討（全体会1回、各部会5回）を重ねてきました。検討会は法人の次を担う人材の育成も含め、課題の整理や法人の今後を検討していくことを目的として行い、法人全体や各事業、地域における現状や課題等を整理し、事業計画への提起を行いました。

○第3期中期計画の作成

当初2022年度からの第3期事業計画でしたが、計画内容の見直しや全職員で共有できる計画にしていくため、2023年度からの第3期事業計画として「今後の法人のあり方検討会」や職員のグループ討議で出された意見を基に改めて作成しました。検討会やグループ討議では職員の活発な意見があり、みんなで法人の今後を考えていく基盤ができたと感じています。

○評議員会・理事会の開催

評議員会・理事会を定例で実施しました。理事会は、起きた問題や「今後の法人のあり方検討会」の中間報告など定例以外にも集まり、意見や助言をしていただきました。現状に対し厳しい指摘もありましたが、今後の法人や経営職としての在り方、より良い職場にしていくためのものであり、今後も相談をしながら法人運営を行っていく必要があります。

○運営協議会の開催

法人組織が変わり、家族が法人運営に関わる場がなくなったため、運営協議会を設置してきました。利用者の家族等の意見を聞くためであり、法人内の利用者家族や地域の障害者家族、職員で構成されています。運営協議会は例年2回開催していましたが、今年度はコロナもあって1回の開催となりました。制度の動きや八尾市の状況などを伝え、家族の現状や意見から話し合い、コロナ対応への職員の大変さとその努力には感謝されています。

2022年度 事業報告

1. 通所施設の概要報告

① ひばり作業所（多機能型事業）

■生活介護事業 定員 40名（現員 35名）

22年度も、作業を日課に位置づけ、各班、それぞれの課題に見合った活動に取り組んできました。人と人との関わりを大切し、作業はじめ、みんなで一緒に取り組み、関係を深めることを支援の柱にしています。

1・2班は比較的障害が重い人の班です。作業にかかわれるよう、仲間の前に部材を置き作業に意識を向け職員と一緒にこなうようにしてきました。また、部材を袋に入れやすくできる自助具を作成する等、作業に取り組みややすくする工夫をしてきました。作業以外の活動は「入浴」や「散歩」を継続し、職員が間に入り、「一緒に行こう」など仲間に声かけを促し、仲間同士がつながる工夫をしてきました。手を自ら繋ぎに行く、遅い人を待ってあげることができるなど、他者を意識する行動へつながってきています。

若い年齢層の3班は、日課をスケジュール化し、作業を日課の柱とし取り組みました。作業へ向かう動機付けや意欲に繋がるよう、「がんばり賞」を取り入れました。がんばり賞を励みに日々の作業姿に変化も見られました。班の中に入ることが難しいTさんも後半期から班室の隣の部屋で過ごすことができている。また、楽しい取り組みや散歩にはみんなと一緒に参加することも増えました。楽しいことを通じて班の輪へ入っていけるよう今後も支援を継続します。

4班は高齢の方が集まった班です。今までの経験から作業へ向かう意欲は高いのですが、身体的、体力的に無理をし過ぎてしまい、疲れてしまう人も増えてきています。休憩時間をこまめに設定し、意図的に休憩する時間を多くとるよう工夫してきました。その他の活動では、他者への関心が高い人たちなので、コミュニケーションは取れていますが、自分の思いや考えを伝えることは苦手な方もおり、「どう言えば相手に伝わるのか」「相手が嫌な気持ちにならないのか」など伝え方について一緒に考える時間を作り取り組みました。この経験がより仲間同士の関係を深めてることへ繋がることを期待しています。

仲間の高齢化に伴い、意欲の減退や音への過敏さなど身体的、精神的に変化が見られます。また、家族の体力面、病気、亡くなれるなどにより家族介護が限界となり退所する方が増えてきています。現在大阪府では約1,100名の入所施設待機者います。しかし、この数は申請した人の数であり、氷山の一角の数字です。この間も入所施設に入ることができず、高齢者向けサービス付き住宅など慣れない環境に突然移行しなくてはいけない仲間もいました。仲間が慣れた環境で安心して地域で暮らすことができる、生活の場の保障が大きな課題となっています。

■就労継続B型事業 定員 20名（現員 16名）

今年度、班室が1階となり、全体の作業の様子が見えやすくなりました。以前より広範囲で仲間同士が関わる機会が増え、みんなで作業をおこなっている雰囲気となってきました。

作業に入る朝の会は重要。気持ちを作業モードに転嫁する機会として位置づけ、司会の場所を班室

中央変更し、席の向きや位置も工夫しました。朝の会で1日の目標を決める際、すぐに発言する人だけでなく、あまり発言しない人をあえて指名し、考える機会も作りました。作業が自分の仕事として位置付けることに期待をしておこなっていきました。課題として、1日の目標が生産性向上や納期と十分にリンクできていない部分があります。1日生産目標は、その日の達成感には結びつきますが、班全体協力して生産性を上げていくことへ繋げる意識づけや仕事への構えに結び付けられる支援を、今後考えていく必要があります。

毎週水曜日に席替えと称し、興味がある作業やいつもとは違う作業にかかわる機会を作ってきました。職員側から少し難しいと思われる作業が、本人努力でできるようになる、出来ることが増えることでまた、チャレンジへとつながることもありました。

作業や取り組みを通じて、人との関りや相手のことを考える視点を大事に支援してきました。互いに苦手意識やこだわりゆえに、そちらを優先して輪を乱すことはまだまだあります。ただ、無理やりそれを正すことや阻むことはしていません。本人に今の状況を話し、考えてもらうこともおこなってきました。大きな変化はありませんが、周りに目を向けるきっかけになると考えています。

<収支状況>

今期の収入は3,025,394円(受託加工費収入3,015,394円、クッキー事業収入10,000円)円でした。当初予算3,510,000円に対し達成率86%でした。21年度は3,169,931円(受託加工費収入3,143,317円、クッキー事業収入26,614円)。昨年度より、154,537円のマイナス収入です。作業量の減少と今期は水光熱費の高騰も上げられます。

クッキー事業、仲間は関わりたい作業の一つではあり、5班の作業として存続は希望するところです。しかし、再開にあたり保健所からの許可を得るために、部屋の改築が必須となります。再開するためには、商品の質や販路、収支等を検討し見通しを持って取り組まなければいけないと考えています。

② ワクワクセンターひばり (生活介護事業)

■生活介護事業 定員35名(現員32名)

今年度も各班ともに「作業や活動を通じて他者との関わりが持てるように」と事業方針に即して実践しました。部材の受け渡しや声を掛け合うなど、仲間同士の関わりを深めていけることと、仲間が「関わりたい」と想えることを意識的に支援してきました。

A班は働くためのルールやマナーとして、「時間を守る、大きな声は出さない、ありがとうと言う、姿勢に気を付ける」などを「なぜ」というところから丁寧に説明していくという支援を続けてきました。また、タイマーを2種類購入して時間が分かりやすいようにしてみる、紙に書いて伝えるなど分かりやすくなる工夫してきました。今までの固定されたルーティーンについては変えることが難しいですが、視覚的に分かりやすくなるなど工夫を重ねながら変化に期待しておこなってきました。

他者との関わりについて、職員と仲間が歌や会話などから楽しい関わりを作ってきました。そこから他の利用者にも関わりを広げられるようなきっかけも作ってきました。その中で利用者発信の関わりや声掛けが少しずつ増えていっており、他利用者への手伝いなども慣れてきたからかさらに広がっている姿も見られます。

B班は長年同じ配置で作業をしていましたが、仲間の新たな様子を引き出す事や他者と関わることに

着目し、机を仲間同士が向かい合わせて座れるように配置しました。お互いの様子も見やすくなり「帯巻きしてや。」「呼ばれてるで」等の声掛けが自然と仲間から掛けられる姿がありました。仲間同士の声掛けや関わりがしやすくなるように、隣同士の組み合わせを工夫し、一体感を感じられるようにしてきました。また、作業中、対面で袋入れをしている人に「一個少ないで。」と相手の作業を気にしたり、帯巻き係りが「ちょうだい」と声を掛けるなど、職員が声を掛けるのではなく、仲間同士声を掛ける様子が増えてきました。

作業外では、今期は工作での画用紙選びや、取り組みのメニューなどで選択する機会を多く作ってきました。選ぶ際にホワイトボードを活用し個人写真を貼り、名前を利用者自ら記入できるよう働きかけました。自分で選んだという自信とそれが実現した嬉しさに繋がった仲間もおり、「楽しみやなあ」「好きな選べたわ」「今度の取り組みは〇〇やわ！」と言う言葉が聞かれました。

C班の活動は、作業と散歩を中心に行ってきました。作業では、1袋完成した時、部材の補充や依頼する時、袋を渡す時など場面に応じて仲間同士、職員とで言葉のやり取りを進めてきました。その結果、自身の蓋がなくなると「蓋ちょうだい」、1袋できた時は「できました」と言葉やジェスチャーで発信できるようになりました。この作業場面でのやり取りをきっかけにコーヒータイムや散歩の呼びかけを仲間にもしてもらう機会を増やしてきました。個人の語彙力が広がってきたことも評価できますが、何より今まで職員からの呼びかけを待っていた人たちが仲間からの呼びかけで行動できるようになったのは、日常的に他者を意識できる支援を積み重ねてきたからだと思います。

散歩は、集団意識と他者意識が見られる場面です。C班結成当初は、バラバラで各々のペースで歩いていましたが、時間をかけてペアを作ってきました。“誰かと一緒に歩く”ことで相手を意識するようになり、それが更に集団化するようになりました。そうすることで、誰かが遅れているときは「〇〇さんを待とう」と言うみんなが待ってくれます。これは散歩の場面に限らず外出時にも“集団”で行動することに繋がっています。

③ つくしんぼ作業所

■就労継続B型事業 定員20名（現員18名）

○利用者状況

現在の利用者は18名で、新たな利用者の確保には至っていません。1名の利用者は肩の脱臼やコロナに対する高齢の父の不安から長期欠席が続いています。家庭訪問や電話連絡を行い状況は把握するようにしています。また、母と2人暮らしだったKさんは、母の死去により今は独居生活で、サービスの利用を続けて生活しています。つくしんぼ作業所でも本人、家族の高齢化は課題となってきています。

○授産事業

普段の給食づくり、グループホームのお弁当やショートステイの食事作り、清掃作業は収入のベースとなっています。コロナ感染状況もあり、以前のような多くの注文はありませんが、少しずつ問い合わせが増えてきています。10月には関西福祉科学大学からの大口の注文を受けました。社会福祉協議会から問い合わせもありチラシを配布し広げてもらいました。一方で総菜販売は中止したままで再開することができませんでした。

○コロナ感染対策

利用者・職員共に日々感染対策に気を付けてきました。それでも感染したり濃厚接触者となることもあり、お互いに補いあいながら業務を行ってきました。つくしんぼ作業所は幸い閉所することはありませんでした。利用者にとってはコロナに対する不安もありましたが、陽性や濃厚接触者となり自宅待機となることで工賃が減ってしまうのではないかとといった不安もありました。事業所としては安心して療養できるよう工賃保障を行ってきました。

○実践

【労働】

外部からの注文が減っていましたが、10月に2日間で230食を超える注文を久しぶりに行いました。初めての経験となる職員が多いにもかかわらず、利用者からは「これくらい（の食数）やったら大丈夫」と話す頼もしい姿がありました。準備状況や盛り付けの写真掲示などすることで、みんなが目標を意識し取り組むことができました。厨房業務ではない清掃班の人たちも部屋の清掃や箱作りなどの準備に協力し、一体となって取り組むことができました。

【生活】

コロナの影響もあり、旅行の中止や取り組みの制限を行っていましたが、作業以外の活動への希望も強く、感染状況を見ながら検討してきました。12月に半日の取り組み（お菓子作りと映画鑑賞）、3月に外出の取り組みを行い、利用者から「コロナでギスギスしている」「みんなと一緒に～したい」といった声もあったため、実施できたことは良かったと思います。

④ りんごの木

■就労継続B型事業 定員20名（現員17名）

○利用者状況

21～69歳の人たちが布、さをり織りの製品製造、下請け縫製の作業を行い、質の高い製品作り、工賃保障をめざしています。自分たちの仕事という意識が全体に広がり、支え合える関係が安心になって新しいことにも挑む姿が見られました。利用率98.9%(現員)。

加齢に伴い健康支援が増え、その人の願いや課題から働き方を個々に見直すことも必要になっています。

○授産事業

コロナで外部販売を再開できないものが多くあり、(コロナ前より外販230万円減、注文・委託80万円増)収支は非常に厳しく積立金を取り崩しました。

原材料・光熱費の高騰に対応して仕入れ先の工夫や製品価格を見直し、ネット販売等を展開しました。イズミヤでの独自バザーは継続実施でき、販売会場に作業場の映像を写し、お客さんからの反響がありました(売上増)。外販の再開で収入確保が必達です。

○実践

【労働】

それぞれが役割を担い、一人ひとりが力を発揮しながら自分たちで仕事が回せるよう支援してきました。自分が理解できている作業は、相手がうまくいっていることもいっていないことも見てわかり、教

えたりできたときに一緒に喜んだりの関係性も育まれました。集団の中で役に立っている自分を実感することは自分への信頼になり、みんなで力を合わせる、みんなとならできる力は自信になりました。たのもしさやゆとりが出てきた人もいます。

日々の目標やふりかえりは各作業室で行い、全体では注文先や販売先、売上、お客様の声などを伝え、掲示しました。仕事はどう社会とつながり、どのように役に立っているか、みんなで考えることで「きれいに仕上げよう」「納期に間に合わせよう」など日常の作業にもつながりました。製品の質を高めるために苦労もありますが、工賃が増えたりお客様に評価されたりする喜びが次の仕事をがんばる力にもなりました。

【生活】

- ・ 仲間の会役員メンバーが、中心になり 10 月映画会、12 月クリスマス会を行いました。役員会の持ち方など仲間からの意見を聞いて改善しました。
- ・ 「障害者権利条約」の勉強会では、「難しかった」の感想もありましたが、“私たち抜きに私たちのことを決めないで”のスローガンに共感し、「今まで自分で決めてこなかった」「どうしたいか聞いてほしい」「決めれない時 相談したい」等の意見が出ました。改めて、情報を知ったり人の意見を聞いたり発言したりの活動が重要に思いました。仲間からも勉強会をやりたい要望が多く出ています。

<通所施設の状況>

障害支援区分（利用延べ人数平均）

内 訳	ひばり 生活介護	ひばり 就労継続	ワクワクセンター ひばり	つくしんぼ作業所	りんごの木
平均支援区分	5.9	4.5	5.8	4.1	4.2
(前年度)	5.9	4.7	5.7	4.1	4.2

利用状況（定員）

通所施設	ひばり(60)		ワクワク(35)	つくしんぼ(20)	りんご(20)
事業種別	生活介護	就労継続 B	生活介護	就労継続 B	就労継続 B
開所日数(年)	242	242	242	242	242
利用率(%)	79.7	74.9	84.9	82.2	84.0
前年度利用率	81.4	77.0	85.7	83.9	84.1

工賃支給状況

通所施設	ひばり		ワクワク	つくしんぼ	りんご
事業種別	生活介護	就労継続 B	生活介護	就労継続 B	就労継続 B
月平均工賃(円)	1,980	11,662	6,014	54,285	30,222
(前年度)	2,824	12,354	5,916	55,313	30,063
最高工賃(円)	3,780	20,160	11,180	74,555	52,414
(前年度)	4,400	21,750	11,180	76,825	52,395

2. 居宅事業の概要報告

①グループホーム支援センター

1. 利用者支援

個別支援計画は、本人の思いを軸に世話人と共に支援方法を検討してきました。高齢・重度化で利用者の介助度は高まっており、支援の統一を図る上でも支援計画の共有が大事になっています。また、利用者の中には将来的に一人暮らしを希望する人もいます。個々の希望する生活を大事にし、GHでどのような支援が必要かを検討し具体化していきたいと思えます。

高齢利用者では身体機能の低下から転倒事故が増えています。必要に応じてホーム内の動線やトイレ・浴室に手摺を設置していますが、車椅子での生活を視野に入れると、現在の住環境では介助が困難になっていきます。高齢利用者の今後の支援については、家族とも検討していく必要があります。

第2ホームでは、リビングを目が届きやすく集える空間に模様替えしました。夕食の食べ残しが減ったり、ソファでのんびり過ごせたりと、過ごし方が変わり住環境づくりの大事さを実感しています。

2. 健康支援

・コロナ禍での支援

昨年12月末に法人内で集団感染が発生し、ホームでも利用者・職員の21名が陽性になりました。陽性利用者は、ショートと2箇所のホームを隔離場所として支援を行い、法人全体で援助体制を組み立て何とか対応してきました。陽性者支援の場所や体制確保の問題は自治体との課題共有が必要です。

・配慮食

誤嚥性肺炎で1ヵ月入院した利用者もいました。嚥下機能低下の診断により、退院後はミキサー食にとろみを加える形態にしています。他にも高齢利用者の嚥下状況に配慮した食事提供が必要になってきていますが、GH世話人でどこまで対応できるのか難しさを感じます。

3. 世話人研修

年間計画を立てて実施しました。

- ・新任研修（1～2年目対象）→6月21日（講師：GH支援センター）
- ・防災、救命研修→11月8日（講師：八尾消防署）
- ・権利擁護（虐待防止）研修→2月22日（講師：吉見氏 大阪聴覚障害者福祉会）
- ・利用者主体の生活支援→3月24日（講師：井上氏 いずみ野福祉会）

4. 災害対策

- ・9月・2月 全ホームで避難訓練及び防災グッズや非常食の確認を実施しました。
- ・災害マニュアルの作成とキーパー会議での共有を実施しました。

ホーム利用者状況 ※2023年3月4日現在

ホーム	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	全体
開所歴	28年目	26年目	26年目	6年目	23年目	17年目	17年目	14年目	14年目	10年目	
入居者数	4人	7人	4人	3人	6人	5人	5人	4人	5人	3人	46人
平均年齢	61歳	61歳	54歳	57歳	61歳	48歳	47歳	52歳	50歳	52歳	平均54歳
平均区分	5.3	5.6	5	5.6	4.5	4.4	4	4.8	4.2	6	平均4.9
4～2月の利用率	99.6%	98.6%	97.6%	98.9%	99.0%	92.8%	99.0%	98.1%	98.0%	98.5%	平均98.0%
帰宅なし利用者 (日帰り・正月のみ含む)	3人	7人	3人	1人	4人	3人	3人	2人	4人	1人	31人

②ショートステイ事業「めろでい」

1. 利用状況

今年度は、年末(8波)に通所施設でのクラスターが起こり、年末年始とショートは陽性者支援の場になりました。ショートでの陽性者支援は初めての経験で、課題も浮き彫りになりました。そのこともあり、昨年度よりも延べ40名の利用数の減少となり、職員も8波で5人が陽性で、コロナの影響としては一番大きかったです。それでも感染拡大を防ぎながら、延べ2404名の利用者支援を支えてきました。

新規契約者は6名(りんご2、ひばり2、法人外2)。ただまだ本人の不安、実態等々、家族の念のためということで契約のみで終わっている人が多いです。年度内から利用を始めたのはりんご1名でした。また本人の希望や実態で何年も使ってなかった人の再開(つくしんぼ1、ひばり1)がありました。そこには家族の入院と言う背景がありました。その後継続利用してきましたが、つくしんぼの方はGHの入居が決まりました。また年度途中には死去(ひばり1)もあり、心傷みました。なおショートの特働は46人が最大でした。

2. 利用者支援の状況

強度行動をもつ人たちと高齢で介護の必要な人たちの支援が混在しているという状況はここ数年続いています。利用者の安全確保、心地よい利用や職員の負担軽減など体制や支援の中身などを確認する会議や研修の場は重要になっています。しかしダブルワークで会議に出れない職員も数名居り、研修への参加も少ないのが実態です。

また通所施設や看護師との連携は多く持つようにしました。母が大病で入退院を繰り返しているケースでは通所、ショート、相談等と連携し、ショートの間所数を増やし、後見人とも連絡を取りながら支援してきました。途中無呼吸症候群でサーチレーションが下がることもあり、現場との調整に苦慮しながらも、継続支援し、年度末には入所施設にショートから送り出すことができました。大病ながら最後入所施設を決めていく過程では、母の頑張りにも頭が下がる思いでした。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	平均・総数
利用人数	44	43	46	44	42	46	46	42	42	40	45	45	44
のべ人数	47	42	47	45	40	44	43	46	46	43	42	44	44
平均人数	206	220	220	197	150	218	229	195	182	154	211	222	2404
	223	211	222	221	139	195	221	219	212	206	189	186	2444
平均人数	6.9	7.1	7.3	7.0	6.5	7.3	7.4	6.5	7.3	7.3	7.5	7.2	7.1
	7.4	6.6	7.4	7.1	6.3	6.5	7.1	7.3	7.6	7.6	6.8	6.9	6.9
利用率	85.8	88.7	91.7	87.9	81.5	90.8	92.3	81.3	91.0	91.7	94.2	89.5	88.9%
	92.9	87.9	92.5	89.1	79.0	81.3	89.1	91.3	94.6	95.4	87.5	86.1	88.6%

③放課後等ディサービスすきっぷ

2022年度途中に、すきっぷの今後に向けて検討し、3年間の支援や活動内容について計画を作成しました。

1. 利用児支援

遊びや活動を通して、子どもたちの良さをひきだしたり子ども同士をつなげて行く事を意識して支援

してきました。異年齢集団で過ごす中で、お兄さんお姉さんらしいふるまいが見られるようになっていきます。みんなの役に立ちたい、よりよく自分を発揮したいとの姿と捉えています。一方で、これまでに小学生が中高生と一緒に安心してすごせないと、利用をやめていくことがありました。異年齢で過ごす良さを生かしながら、みんなが安心して過ごせるような集団のあり方を検討していきます。

学校や他の事業所とのケース検討では、それぞれの場ですごす様子が違い、役割に気づいたりこどもの姿を多面的に見ることができました。支援の方向性の共有につながり今後も続けていきます。

2. 家族に向けた取り組み

5月	個人懇談（小、中1、高1）	11名
6月	個人懇談（中3、高3）	11名
	学習交流会①「卒業後の進路について」 講師：卒業生保護者	11名
7月	個人懇談（中2）	3名
9月	個人懇談（高3）	9名
10月	学習交流会②「卒業後の暮らしの場って？」 あっぷる山本	9名
11月	グループ懇談会（3日開催）	12名
12月	学習交流会③「グループホームの生活について」 GH 森実	13名
2月	親子企画 「らくらく登山道をおこう」	親・兄弟 12名 利用児 12名
3月	写真展&ショートステイ見学会（3日開催） SS 佐々木	13名
	卒所式	11名

学習会では、卒業後の生活をイメージし考えるきっかけとなりました。社会資源の少なさや制度の不十分さへの不安も出されました。親子企画も再開し、家族同士や職員と交流しながら、子どもたちの成長と一緒に感じあえる機会となっています。

3. 他機関との繋がりを強化・支援の充実

就学前施設「しょうとく園」を見学・訪問し、担任と新規利用児の引継ぎや、学校や他事業所とのケース検討により、他機関とのつながりができてきました。また連絡会議では、国や市の制度動向、不登校児や学校との連携について情報共有しました。また、運営面の厳しさ、休校時の対応、土日開所等について意見交換をしました。

4. 事業所に関する情報の発信

通信を学校や他事業所へ配布しました。新規の見学や利用の相談をうけることが少しずつ増えてきています。卒業後の生活や作業所での様子を考える機会として、信貴福祉会ニュースの利用児配布を始めています。

5. その他

親の就労や家族状況により休日余暇支援の必要性を感じており、土曜開所のあり方について検討します。

契約状況

	小	中	高	総数
21年度	5名	11名	19名	35名
22年度	5名	5名	20名	30名

利用状況

	開所数	延利用数	希望率	利用率	平均人数	実人数
21年度	244日	1928人	92.0%	79.0%	7.9人	36人
22年度	251日	1655人	73.0%	65.9%	6.6人	29人

④ヘルパーステーション「メロディ」

1, 感染予防に努め、関係機関との連携、情報交換をすすめます。

前半期の自立支援協議会地域生活支援部会は、コロナ感染拡大のため、中止となっています。ヘルパー不足の課題は、高齢者、障害者ともに不足しており、共通課題の解決にむけた横のつながりが大切です。

2, 利用者のニーズに応え、支援の拡大・拡充をめざします。

メロディおんがく隊に加え、バス、特急利用特別企画、車両利用企画（レッツワゴン）、クリスマス会に拡大しました。ヘルパー増員のない中、グループ支援型、車両移送型を取り入れることで、より多くの仲間の参加を可能としてきました。またクリスマス会（2日間29名）ではⅡ型との併用で長らく利用がなかった仲間の参加もありました。

選挙投票支援について、山本出張所も期日前投票ができるようになり利便性が向上しました。ホーム利用者を中心に投票した人は18人。説明会はGH支援センターが行い、通所施設、GH支援センターと連携して投票支援を行いました。

3, ヘルパーが働きやすい環境づくりを進めるとともに、質と量の充実をめざします。

5月にヘルパー会議を実施。2回に分けて9名が参加しました。コロナ禍での対面での会議の実施は

初めてとなりました。ヘルパー間の交流のない中、グループでの外出の希望や、外出先での留意点など情報交換を行いました。

4, マニュアルをヘルパーと検討し周知していきます。

ヘルパー活動マニュアルの見直しをしました。

マニュアル改訂は①理念的なことと、具体的業務内容を整理。②法人理念や法的根拠も触れる。③「禁止」からQ&A形式に。わかりやすく親しみやすい、という方向で改訂しました。マニュアル見直しについて検討したところスタッフ間の認識の違い、ヘルパーに対しての指導内容がスタッフ間でずれていることが明らかになりました。また改めて移動支援の難しさを考えあいました。災害、見失い、事故対応などを現状にあったものに変更し、携帯できるA5版形式にしました。

＜利用状況＞

☆利用時間

	2022年度	2021年度
居宅介護	2,218.5	2,380.5
移動支援	4,187.5	3,994.5
行動援護	0	0

☆延べ人数

	2022年度	2021年度
居宅介護	1,345	1,538
移動支援	1,274	1,687
行動援護	0	0

⑤障害者・児生活支援センター「あっぷる」

1, 相談支援について

認定調査	今年 (昨年)
	198 (279)

計画相談	作成 (昨年)	モニタリング (昨年)
成人	387 (325)	524 (437)
児童	72 (55)	98 (61)

認定調査と計画相談は月ごとの目標数を出して取り組んできました。障害者の相談で多いのは「親の介護負担」です。サービス利用してこなかった人は、親子共に不安があるため、支援に時間がかかりません。次の「居宅サービスの利用」は、ショートステイの支給決定はされますが、事業所が不足のため利用できないことが多いです。また「暮らしの場」はGHや入所施設の相談です。GHが増えてもすぐ入居できないため、サービス付高齢者住宅の入居もありますが、知的障害者には適しているとは思えません。

児童の相談が増加しており、「放課後・休日の過ごし方」の相談が多いです。親が就労しており放デイは土日の利用ニーズが高いです。一方で、塾のような事業所も増えてきています。ガイドヘルプのニーズもありますが、ヘルパー不足で利用できないことが多いです。

市と委託の所長会議は、定例化しています。委託費の引き上げ、GHの支援が見えない問題など話し合いました。実務者会議は実施できませんでしたが、再開を確認しました。

今年度は、就業・生活支援センターと事例検討会を2回実施しました。現場のスタッフだけでなく、客観的な立場の人の参加で問題の捉え方が変わるなどがあります。

2、事業所間連携

基幹相談支援センターは十分に活用できませんでした。問題や課題を共有してゆくための意思疎通は大事であるため、次年度に引き継ぎます。親に介護が必要となり、子どものケアの相談が続いています。地域包括支援センターなど高齢分野と連携し、親子両方にヘルパーを派遣などしました。8050問題など障害分野だけでは対応できない問題が生じており、他分野と連携してきました。

地域の事業所から相談が持ち込まれますが、事業所の差が大きいです。「うちでは無理」と簡単に言い切る事業所もありますが、「何とかしたい」という気持ちが伝わる事業所もあります。連携とは誰かが解決するものではなく、本人の立場に立って何が大きかを一緒に考えてゆくものと再確認しました。

3、地域における役割

自立支援協議会はコロナ禍で活動が制約されましたが、初めて事例検討会を実施し、70名近く参加しました。他事業所のレポートは当法人事業と共通の内容があり、参加者の学びになりました。

委託相談支援センター研修を実施しました。基幹相談支援センターも参加し、後日、研修の意見交換会も行っています。障害種別による親子関係の違いや地域の社会資源の問題などを話し合い、事業所の支援の方向が変化したケースもありました。

○未来を拓くゼミナール（日中一時支援事業）

今年度は「社会の中で起きていることを通して、考えを深めてゆく」をテーマに、様々なことに目を向けて考えてきました。

4月	話し合いゼミについて振り返る	10月	SDGsについて
5月	外出（奈良）	11月	戦争について
6月	参政権と選挙について（国政選挙）	12月	交流会
7月	8050問題について	2月	外出（鶴橋）
9月	将来の暮らしについて	3月	選挙について（統一地方選挙）

⑥八尾・柏原障害者就業・生活支援センター

今年度は、企業の雇用への動きが徐々に戻り、相談者の就職活動への動きも少しずつ増えてきました。それに伴い地域の事業所からの体験実習等に関する相談も増え、取り組んできました。

企業からは、雇用に向けた相談の他、障害者手帳や診断はないものの「働くにあたっての困難さ」のある従業員に関する相談などもあり、社内研修による理解促進やジョブコーチ支援制度の活用に関する情報提供を行う等企業への支援を行ってきました。

今年度初めて、八尾支援学校の就職を希望している生徒向けにセンター見学や職業講話を行いました。在学中から本人や企業に関わることによって、卒業後のスムーズな支援に繋がっていきたいと考え実施し、後日センターのことを本人が予め知った上で登録に至ることができました。また柏原市の相談事業所を対象にしたセンター事業の周知活動なども行い、地域の関係機関との顔の見える関係作りをめざして取り組んでいます。

あっぷるとの合同ケース検討会を行い、就労面だけでなく当事者の成育歴や家族状況など生活全体へ視点を向けることで、課題やニーズの捉え方が変わってくることを改めて確認できました。

○精神障害者ジョブガイダンス事業

事業所に訪問し、障害者・支援者向けに講座を実施。(清心会メンタルクリニック、ぷろぐれっそ)
企業見学(スミセイハーモニー)

○障がい者雇用を考える集い

主催 柏原市、八尾市、大阪府総合労働事務所、八尾・柏原障害者就業・生活支援センター
日時 9月15日(木) アゼリア柏原
参加者 26名(企業・支援機関22名、その他)
テーマ 「ともに働く職場をめざして～わが社における障がい者雇用～」

○はたらく・くらすパワーアップセミナー(八尾市障がい者就労支援推進事業)

参加状況) やるきアップコース 職場体験実習 : 就労移行 6名

○働く仲間のつどい(日中一時支援事業) 登録者 105名

実施回数 計10回(学習会5回、レクリエーション5回) 参加延べ人数 165名

○実施状況

		2022年度	2021年度
障害者に対する支援	登録者数	443名	391名
	新規登録者	52名	59名
	相談・支援件数	1,940件	1,940件
	就職者数	32名	34名
	職場訪問	155回	123回
	職場実習者	24名	6名
事業主に対する支援	相談・支援件数	438件	322件
	職場訪問	228回	164回

⑦ 地域活動センターひばり

ひばり作業所を活用し、第3・第4土曜日に仲間の余暇活動の一つとして取り組んできました。職員だけでなく、地域の専門の方々に協力いただいています。

22年度は仲間の新たな要求を元にメニューを増やす予定でしたが出来ませんでした。今計画は23年度に引き継ぎます。また、コロナ禍による中止もありましたが、次年度は感染状況を見ながらですが、なるべくそのようなことはおこなわず、仲間の楽しみを保障できるようにしていきます。

() は前年度

内容 / 項目	デイサービス	ウォーキング	お菓子づくり①	お菓子づくり②	墨 絵	工作/園芸	料 理
スタッフ	職 員	八尾山の会	職 員	職 員	石見先生	飯尾先生 川江先生	職 員
延べ利用者数(人)	121 (85)	105 (102)	53 (53)	53 (50)	54 (60)	76 (70)	64 (51)
実施日	第3土曜・日曜、 第4日曜	第3土曜	第3土曜	第4日曜	第3土曜	第3日曜	第3土曜

3. 実習生の受け入れ

社会福祉士実習 (1か月)
 常磐会短期大学学生実習
 八尾支援学校高等部実習
 大阪経済法科大学 インターンシップ

4. 事故・苦情報告

通 所 施 設	ひばり作業所	ワクワクセンター	つくしんぼ	りんごの木
事故件数 (昨年度)	10 (12)	0 (1)	0 (0)	1 (0)
ヒヤリ・ハット件数 (昨年度)	56 (83)	24 (55)	22 (34)	15 (20)
苦情・要望等件数 (昨年度)	2 (7)	4 (5)	1 (1)	5 (5)

*活動センター ヒヤリハット 5件 事故 1件

居 宅 事 業	ショートステイ	グループホーム	放課後デイ	ヘルパーステーション
事故件数 (昨年度)	9 (13)	23 (30)	1 (4)	1 (5)
ヒヤリ・ハット件数(昨年度)	35 (38)	156 (128)	104 (123)	24 (63)
苦情等件数 (昨年度)	6 (10)	2 (1)	4 (6)	7 (6)

主な苦情の内容

申出者	申出内容	対応内容
家族(通所施設)	処遇に関して(職員の対応) 本人の自転車がパンクした。前にもあり故意ではないか。怒りがおさまらない。自転車を押して1時間歩いて帰った。こちらの辛さを感じて修理の対応等してもらえたらよかった。	防犯カメラを確認し、対応する旨を伝える。修理の対応や車で送る判断ができていなかったことを謝る。母と一緒に防犯カメラを確認し、母から申し訳ない気持ちでいっぱいと言われる。 職員から当日の状況を聞き取り、班会議でふりかえった内容を本人、母に伝える。
利用者 (通所施設)	処遇に関して(職員の言動) 自分の食事介助について、「また食事介助か」「新しい職員にも食事介助してほしい」と、自分に聞こえるようにA職員が言い、悲しい気持ちになった。	A職員と3回面談をし、事の重大さについて認識を求めた。始末書の提出を指示し、担当する仕事内容を一部変更した。本人に謝罪し、確認した内容を伝えた。
家族 (放課後デイ)	別の利用者の領収書が郵送されてきた。 (領収書類を同じ苗字の別の家族に送付してしまう)	誤送付した先と本来の送付先両者に経過説明し謝罪。個人情報取り扱いについて職員間で共有。名簿が混じらないようデータ整理。発送作業でのダブルチェック。
家族 (放課後デイ)	服が濡れままカバンに入っていた。筆箱なども濡れてしまった。濡れたものはビニール袋に入れてほしい。	送迎時に謝罪し、翌日管理者から架電。着替えの扱いについて他の利用児も含め必ず袋に入れるよう共有。
家族 (ショート)	書類を持って行ったのに、そのまま持ち帰った。	毎回連絡帳を確認することを職員で共有。現場に入った法人職が必ず最終確認することを位置付ける。
家族(GH)	ホームへ送って行った際、対応したキーパーの態度が悪くとても不快だった。日常の支援についても不安になる。	管理者から家族へ謝罪。対応したキーパーには管理者から厳重注意したことを伝え、日常の利用者支援の状況を説明。 キーパーへは厳重注意し、キーパー会議でも家族対応について共有する。
利用者 (ヘルパーステーション)	グループでのドライブ企画で、利用者Aへのヘルパーの言動がAをからかっているように聞こえて嫌な気持ちになった。	利用者から状況聞き取りを行う。管理者からヘルパーに言動が行き過ぎていたことを指導。利用者支援時の適切な言葉かけについて伝える。

5. 職員研修

(法人内研修)

対 象	月日	研 修 内 容	講 師
新任研修	7/14	① 障害福祉の動向と支援者の役割	・ 田横所長
	7/14	② 私たちの仕事と就業規則	・ 本田直子社労士
	7/21	③ 日中活動の場と暮らしの場の役割/地域における生活相談の役割	・ 森実所長/山本所長代行
2～5年目 法人職・一般職・ 非常勤職	10/24	① 障害者・家族の生活と支援の視点	・ 田中智子氏（佛教大教授）
	11/10	② 事業の役割と共通する支援	・ 佐々木所長
6年目以降 法人職・一般職・ 非常勤職	11/17	① 事業所の現状	・ 辻事務長
	10/28	～無認可作業所の経験を通じて～ ② 夜間中学を通して見る地域課題 ～マイノリティの視点と人権～	・ 中谷全徳氏
主任・副主任・管理 者	11/9	① 職員の育成・指導の課題	・ 津田耕一氏 (関西福祉科学大学教授)
	1/31	② 部下指導を考える	・ 本田直子社労士
経営職・管理職・主 任	9/7	① 社会福祉法人制度の成り立ちとこれからの課題	・ 石倉康次氏
全職員	11/30	① 地域生活を支える相談支援の役割と支援システムづくりと一人ひとりの職員の役割	・ 木全和巳氏 (日本福祉大学教授)
	1/20	② 社会福祉のこれからを考えるために ～平和の問題と日本の現状から～	・ 西谷文和氏
ステップアップ セミナー (管理職)	10/29	① 経営・管理職が理解しておくべき基本事項 ② 就業規則から学ぶ ～労務管理トラブルを未然に防ぐ～ ③ 社会福祉法人経営における支援の重要性、優位性を考える	・ 中村公三監事 ・ 本田直子顧問 ・ 久澤貢理事
その他		防災、救命研修 権利擁護（虐待防止）研修 利用者主体の生活支援	

	人材確保と定着に向けた取り組み	
--	-----------------	--

(外部研修)

主 催	研 修 名
大阪府	虐待防止権利擁護研修 サービス管理責任者等基礎研修
八尾市	自立支援協議会全体研修 施設連絡会障害施設部会研修
経営者協議会	経営協総合研究大会
経営者同友会・経営全国 会議	人材育成・経験交流会 財務管理研修、労務管理研修
セルフ関係	全国社会就労センター長研修会 セルフ部会研修
大阪障害者センター及び ネットワークポポロ	施設経営・管理者・主任セミナー、 福祉施設障害者支援基礎講座 医学的基礎講座 ネットワークポポロ 意見交換会
その他	きょうされん 実践交流会 第45回全国大会 in いわて 22年度基礎講座 きょうされん 大阪支部研修会 柏原市高齢・障害者虐待防止ネットワーク研修 主任就業支援担当者研修 就業支援担当者研修 日本知的障害者福祉協会 障害者支援施設部会全国大会 in 大阪 全国就業支援ネットワーク 定例研究・研修会